

春燈

昭和二十一年七月二十三日第三種郵便物認可

平成十七年四月一日発行（毎月一回）日発行（第六十卷）第四号

4 月号

弔

辞

(抄録)

俳人協会顧問・前会長

松崎鉄之介

謹んで成瀬櫻桃子さんの霊に申し上げます。

貴方は大正十四年生れで、旧制中学校時代の国語の先生堀徹氏から俳句を学び、十五歳頃より作句し始めたと書いております。早熟であつたと考えられます。大学は（現）横浜国大の工学部でしたので、隣の（旧）横浜商工実習学校の教師であつた大野林火を知り、大野林火が昭和二十一年に創刊した「濱」へも投句されており、弘明寺の林火の自宅へも出入りしておられたと聞いております。ここに古い「濱」がありますので見ますと、成瀬火汲の名で林火選に入っております。

岩肌を走りゐる水温むかな（昭和22年6月）

探照燈走り港の涼新た（昭和2年9月）

これらの句には貴方の句いが宿っているように思います。昭和二十一年一月「濱」

の謄写版刷りの創刊号が出た時、総合雑誌で、汚らしい雑誌であるが、よき主宰者を得て若々しく熱氣に充ちてをり将来の発展を期して待つべきものがある」と褒めてくれたのが、他ならぬ安住敦氏でありました。林火と敦はそんな関係から親しみを互いに持ち合ったのではないかと考えられます。

貴方が亡くなられて改めて自註句集を読みました。

たんぽぽや子ごろすでに貧を知り（昭和31年）

長女美菜子さんの誕生の句です。

地に落ちぬででむし神を疑ひて（昭和34年）

註に長女美菜子はダウン氏症とも云われ、重度精神薄弱。目の前が真暗、一度は神を疑ったとあります。この句以来美菜子さんのダウン氏症は貴方のその後の人生を狂わせてしまったと云って過言ではありません。然しながら貴方はしっかりと踏み止まりました。

片言の子のもどかしや春隣（昭和36年）

降誕祭この不具の子も神の子よ (昭和38年)

奇蹟なしや降誕祭の不具の子に (昭和39年)

春窮や不具の子持てば生き抜かむ (昭和40年)

天高し仰ぎて泪こらへけり (昭和40年)

美菜子九才六ヶ月となる。神奈川県大磯町の素心学院に去る。彼女の大好物のインスタントラーメンを沢山持たせてやった。とある。この滂沱たる泪は本物というより血涙でもありましよう。

手毬つく十まで数ふことできて (昭和50年)

「美菜子は一九才になった。本人は一九才ということは認識していない。反復して覚えた数字と、物体の数と、時の暦数とは彼女においては別々だ」。美菜子は十九になりました……何か梁塵秘抄の一節を思い出させましよう。

貴方は何ら思い残すことなく美菜子さんの面倒を見てやったのであります。私は本当に有難う御座いますと貴方に申し上げたい。

親がらす歩み子がらすつづきけり (昭和40年)

この句は私の脳裏に深く刻まれております。親として立派にやるべきことをやり
終えた貴方です。どうか安らかにねむり下さい。

年の暮別れ烏のあと追へり 鉄之介

(平成十六年十二月十七日)

東京都北区上中里「城官寺」に於ける告別式にて

櫻桃子先生追悼

鈴木 榮子

櫻桃子先生の御葬儀の日は、よく晴れていましたが風が強く、「佳き句を成せよ」と春燈の門人を叱咤してくださっているようでした。

櫻桃子先生はみな様ご存知のように久保田万太郎、安住敦を師系とする俳誌「春燈」の三代目として、故安住敦を助けまた久保田万太郎を顕彰し、その三代目の責務を充分に果たされました。「春燈」という俳句結社を立派に引継いで下さり、多くの春燈会員にとりましても信頼し尊敬出来る主宰でありました。

その間、先師安住敦が俳人協会会長を勤めましたときには、俳人協会理事として協会の運営に参画いたしその責を果たしました。

またその間ご自身も平成七年『久保田万太郎の俳句』により第十回俳人協会評論賞を受賞されましたことはご本人のみならず「春燈」一門にとりまして誠に慶事でありました。

その後、俳人協会副会長となられその重責を無事務めました。そして俳人協会の名誉会員として協会運営に尽力しておりました。

安住敦先生より引継がれました春燈を、深い造詣によりますますその幅を広げられ確乎

たる結社となさいました。そのことは誠に有難く弟子一同幾重にも感謝申し上げます。

櫻桃子先生のご生涯は持つて生れた優れた資質により恵まれた生涯ではありませんが、必ずしも全く平坦な道ではありませんでした。よくその知力、お人柄、経済力を以て人生を全うされました。

昭和二十年、この作家二十（はたち）のときから四十七歳にわたる作品を昭和四十八年に第一句集として纏められ、第十三回俳人協会賞に輝きました。

これが『風色』という句集であります。

その時、この句集を師として世に出された安住敦の纏め方には、必ずしも本意でなかったお気持ちを内部の者に洩されたと聞きます。しかしこの『風色』の世界こそ神の子を委ねられ、お育てになった成瀬櫻桃子先生の崇高、悲壮な試練のプロセスが文芸として昇華されたものです。またその故に家族の睦じさ、心の寄り添いを生み、敬虔な聖家族としての神の寵愛を受けられたと思っております。

成瀬先生はまだまだこれから俳句の上でもご業績を重ねられるお方でしたが、三年ほど前より急にお体をこわされ、入院、退院をくり返され、私達の期待もむなしく残念なことに平成十六年十二月十四日九時十五分ご逝去遊ばしました。

私共まだまだ成瀬櫻桃子先生のご指導のもとに勉強いたして行きたいと希っておりますので、誠に痛恨の極みでございます。

今はただただ先生のご冥福をお祈りするばかりでございます。

成瀬櫻桃子先生どうぞ母上様、美菜子様のおそばでゆっくりお休み下さいませ。

ご冥福をお祈りいたします。

合掌

靈魂の転生（抄出）

（トランスマイグレーション）

成瀬櫻桃子

1

いづれのおほんときにや日永かな

私の俳句の師だった久保田万太郎（一八八九—一九六三）の六十二歳の時の句である。

「いづれのおほんとき」で誰もが、すぐさま『源氏物語』第一帖の冒頭の文章を思い出すに違いない。助動詞「なり」の連用形「に」に「や」の係助詞がついた形で「だろうか」の意だ。「おほんとき」は「御時」で「いつの御代のことだろうか、今と同じような日永（晩春）の頃の物語である」の句意で、千年前と現在

の「日永」を同一視しているのが、この句の見どころである。

これから私の書くことは、今では「いづれのおほんとき」とも言つてよい半世紀以前の私の少年時代の思い出である。私の母は私の生後十か月のとき離婚して、岐阜県も木曾寄りの山中から、彼女の伯父夫婦を頼つて上京して来た。

伯父夫婦は子供が無かつたため私を孫のように可愛がつてくれた。それゆえ母は再婚もせずにそのまま老いて東京の土となつた。

山手線が現在のように完全なループ・ラインに完成したのは、私が生まれた大正十四年十一月である。だから山手線と私は同齡というわけで、いつも利用している。

2

私が滝野川教会の日曜学校に行くようになったのは小学校四年生の時だ。圓勝寺の参道に集まり、メンコ・竹馬・縄跳び・兵隊ごっこ・ベエ独楽…ありとあらゆる遊びを日の暮れるまでした。蝙蝠や椋鳥が、季節季節に群舞している。子供達を塀に凭れて眺めている、今で言うなら浪人生がいた。小野圭の英単語集を持つ

ていた。子供達と仲良くなってウノさん（宇野か鶴野か失念）と呼んだ。ウノさんは圓勝寺門前の山手線に向いた、他の家より大きい邸に住んでいた。ウノさんはアオヤマガクインという遠い所の学校へ合格したと聞いた。同じ中里の町内に在る聖学院と同じキリスト教の学校だという。私と青山学院の初めての出会いである。

圓勝寺の息子は私より一年下の幼友達で彼岸・花まつり・盆・十夜・浄土宗の行事には欠かさず行つて住職の説法を聞いた。「門前の小僧習わぬ経を読む」そのもので、般若心経・正信偈・一枚起請文などを自然に覚えた。内容の意味は成人以後、勉強して理解した。母も育ての大伯父夫婦も揃つて人並以上の浄土宗信者で抹香臭く育つた私にとって、坂の上にある白壁の教会堂は眩いばかりの憧れで、天国はあの中にあると思つていた。

それをウノさんに話すと「こんどの日曜日に連れて行つてやろう」ということになり夢が叶えられた。

牧師は友野さんと言い、受け持ちの先生は岡さんという二十歳超えた位の優しい人で、栗原小巻を見ると面影を思い出す。

友野牧師の話は小学生には難しかったが最初に覚えたのは「エホバ」と「ホサナ」だった。「ホサナ」は圓勝寺の説法で聞いた「菩薩乗」と同じだろうと子供心に解釈した。

それよりも岡さんの話の「少年タビデとゴリアテ」のほうが面白かった。家に帰つて毎回の話をする、母や大伯母（大伯父は私の六歳の時に死んだ）は興味深く耳を傾けて、類似した仏教説話を母と語つて満足の日つきをした。

教会に行く愉しみの一つは美しい力ドを貰えることだった。最も愉しかったのはクリスマスで、五年生のとき、私は三人の博士の一人に選ばれて小学校の学芸会以上に張り切つて熱演した。そのとき岡さんから貰つたプレゼントのブリキ製の機関銃の玩具が、軍国少年だった私を有頂点にさせた。

3

ウノさんは青山学院を卒業して会社員になり、私は工業学校へ進学した。圓勝寺周辺の家からも次々に出征兵士が増えた。始めは幟を立てて駒込駅まで送つたが、日本が敗けていく度合に合わせたように目立つようになくなった。山手線に沿う貨物線は兵士輸送の列車

が連日通過した。車窓から兵士たちが国許へ出す非合法の手紙を投げて行ったものをポストへ投函した。泥沼の敗けいくさの戦場へ運ばれて何人が生還しただろうか。

ウノさんは勤めて半年位で入隊した。別れの日、手のひら版の新しい聖書を呉れて「お母さんを大事にして下さい」と言った。昭和十八年の秋で山手線の堤に昼の虫が鳴いていた。翌年、軍事郵便が来た。何処に居るのか軍の機密で解らないが、朝露を溜めて飲み水にしていると記してあった。後年、風の便りに聞いた話だとサイパン島だったようだ。

昭和十九年七月、サイパン島日本軍玉砕。ウノさんは、自分の聖書を胸に抱いて米軍に突入したに違いない。平静な心で召天したことは疑いない。毎年七月になるとウノさんの形見となった聖書を取り出してご冥福を祈る。聖書からウノさんの手の温かみがよみがえってくる。

昭和二十年四月十三日、米軍大空襲で滝野川教会は焼失した。藍染川の近くに在った養老院では多くの老人達が焼死体となった。圓勝寺と聖学院だけは焼け残って罹災した人達の避難の拠り所となった。物資や

寝場所を得ただけでなく、煉獄をくぐって来た人達に十字架や如来像が、何より大切な心の安息を恵んだのだ。五千トンの焼夷弾に宗教が勝ったのである。

山手線は三日目に全通したように記憶している。今から思うと大災害の割には復旧が早いのに驚く。当時の極度の「戦意昂揚」が良い意味で役立ったものと思う。

私は焼け出されたあと、旧滝野川教会より徒歩二分ほど奥のほうに今も住んでいる。現在の山手線はスチール・ボデイ冷暖房つきで一周、二十九駅を六十三分、二分三十秒おきに回りつづけている。

私には轆轤の音が「輪廻・輪廻」と聞こえてくる。人間達のために、より良き「転生」を願っている。

（青山学院女子短期大学同窓会
国文科会研究史『菁菁』より転載）

『素心』以後 30 句

鈴木栄子 選

残菊にしかと日ざしのありにけり

草餅や宗祇の越えし箱根山

金木犀神も媚薬をつくりけり

なぐさめてゐるはをんなや近松忌

十六夜や海の底より平家琵琶

狐火に日めくり瘦せてゐたりけり

比良八荒音の歪みし三井の鐘

死んでから褒められてをり鮫鰯鍋

風呂吹半円愛憎はフィフティ・フィフティ

良寛に思ひびとありし雪椿

白玉や二世契りしといふは嘘

ななかまど熱愛すれど情死はせず

隠れたる女滝のしどろもどろかな

秋風や大仏の掌に生命線

俳諧に伴奏あらば瓢の笛

紫陽花やきのふの色に未練なし

色変へぬ松や風狂死ぬるまで

秋の蟬能面耳を持たずけり

鈴鹿峠雨にけぶれる菜飯かな

双つ蝶もつれて死ぬる時忘れ

野火点けて縄文の声放ちけり

夏草やローマを語る石と石

舟虫はユダの目つきやひげうろたふ

繭玉揺れ万太郎の声敦の声

夢窓忌や京寸法の嵯峨豆腐

風死すや神聖家族聖堂未完成

木々の芽吹く初心初心と天を指す

佃島ほどの小さき夕立かな

智恵薄き子も神の子や虹拝む

子の霊にルルドの泉供へけり

主宰の句

西ヶ原日記 (五)

鈴木 榮子

指定席より自由席よし春あかつき

獺のまつり人は万年筆ならべ

日迎へを済ませてお茶のおはぎかな

ふらここや数へるならば漕がざるよ

ドナルド・キーン先生古河ガーデン薔薇さかり

当月集

鈴木 榮子選



○ 白神知恵子

一宮に旧友つどふ賀状かな
行間も余白も新婚初便り
舞ふ獅子の口にくはへし新紙幣
福引きを待つ福耳の人の後
松過ぎや一塵もなき神の庭

○ 金子輝

ぼつぺんのとぼけし音の昏れにけり
人みなが語部となる冬ともし
梅早し心くぼりの薫りけり
製材のベルトたぶたぶ日脚伸ぶ
反り返るミュシャの美女はも春浅し

○ 宮地れい子

双六もいろは歌留多も上がりは京
口癖の六根清浄春立ちぬ
花時の四百四病に効く薬
春は曙耳さとくなりにけり
否応なしに雛壇の内裏雛

○ 伊東湘三

降る雪や三連隊に近き酒肆
坑帽の遺品となりし冬の壁
青春のマントに残るものがたり
ロボットに声かけて寝る寒夜かな
肩書を追ひし日もあり西行忌

余言

鈴木 榮子

させて頂いている。どうぞお許し下さい。

ぼつぺんのとぼけし音の昏れにけり 金子 輝

「ぼつぺん」は出ていない歳時記もある。関西でぼつぺん、東京でぼこんぼこんという、とあるがそうでもない。

民芸館などではよく見るが、フラスコの先の部分に薄い硝子の玉のようなものがついている。もともとその擬音から名が付いたように思う。

一番イメージ出来るのは、歌麿の「ビードロを吹く女」がまさしくこれだ。異国から入って来たのであろうか。

春燈では昔からよく出てくる季語である。

降る雪や三連隊に近き酒肆 伊東 湘三

それと並んで 青春のマントに残るものがたり //

年賀状の句としてすっきりしている。賀状の句は出した、貰ったの域を中々離れない。

年賀状という季語は身近にあつて誰でも心に浮ぶが、中々思つたような句にならない。この句は美しい。

今年も学友から同窓の友から賀状が来た。学友とは普段逢つていないので年賀状で時効の中断をしている節もある。

この句は意表を突いて賀状を友が集つたと表現したことがよかつたが、それに一筥がまたよい。箱、匣、函、筐、筥、筥は筥迫の筥であり、なんとも美しい字ではないか。よい交友が続いていることであろう。年賀状は誌友の方々には失礼

があるので作者は七十代後半か。三連隊は麻布三連隊で、皇居に近い聯隊は一度ことある時は……の隊なのであろう。先輩達の句に「三連隊の喇叭で起きた」というような句があつた。朝早く起床喇叭でも吹かれたら麻布の人達は寝てはいられないだろう。いやそれを聞くことを楽しんでいたかも知れない。

成瀬先生邸も小宅も北へ行く列車の音が聞える。私の方は

ゴトンゴトンと遠くから床に響いてくる。成瀬邸は裏の高台へ出ると上野を立て来て来た列車が通る。先生の方からは崖上で送っている家族が見える。送っている方からは列車内の判別は出来ない。それでも送りに出たいのが家族である。私も一緒に汽車を送って立っていたことがある。